

『若き日の大作曲家～大作曲家の出世作：ラヴェル』

伊藤美由紀（2400字）

ラヴェルの作品数は、約60曲で多作ではない。約半分となる30数曲は、30歳までに書かれている。生涯を通して変わることのなかった芸術に対する強い信念が確立されていった30歳になるまでの歴史を、振り返ってみたい。

モーリス・ラヴェルは、1875年、バスク出身の母と、スイス人の土木技師である父の間にバスク地方のシブールという小さな村で生まれた後、パリに引っ越し、愛情に満ちた、弟を含む4人家族のなかで育った。母親の歌うバスク地方の子守唄を聴いて育ったラヴェルは、スペイン音楽に深い愛着をもち、彼の作品の中に、度々その影響をみることができる。父には発明の才能があり、自動車製造や鉄道建設に従事した。弟は、自動車関係で働くことになり、ラヴェルも、父の影響で、機械的なものにいつもひきつけられていた。又、父は、文化、音楽に造詣が深く、学生の頃にはピアノを習い、コンクールで賞をとる実績もあった。その為、自分が果たせなかった経歴を息子に実現させたいという想いも強く、息子の才能を認めて音楽家にしようと決断したのは父であった。7歳でピアノを習い、12歳で和声学と対位法を学び始める。早い時期から作曲の基礎を身につけたことが、創造的技巧の発展に繋がったことは疑いなくであろう。又、14歳の時に、パリで万国博覧会が開催され、ロシアや東洋の音楽に触れ、エキゾチックな音響的魅力に奪われる。同年、パリ音楽院のピアノ科に入学する。パリ音楽院での学生時代に大きな成長をとげる。

同年にピアノ科に入学し、同い歳の親友となるスペイン人、リカルド・ヴィニェスとは、文学、音楽で刺激を受け合う。ドビュッシー、ラヴェルのピアノ曲初演は、総じて彼による。ヴィニェスからの影響により、象徴主義の美学に惹かれ、マラルメ、ボードレー、エドガー・アラン・ポーのようなエキセントリックな賛美を愛好する。ピアノ科での成績はまずまずであったが、小柄で手が小さかったことや、創作意欲のほうが勝っていたことから次第に作曲のほうに焦点が置かれていく。

最初期作品である18歳頃に書かれた全音音階、オスティナートを多用しているピアノ曲《グロテスクなセレナード》は、シャブリエの影響を、歌曲《愛に死せる女王のバラード》は、サティの影響を受けている。その頃の曲名は、サティの影響や、精神的なダンディズム、アイロニーを含んだものが多い。逆

説的なアナクロニズムを含んだ曲名のピアノの為の《古風なメヌエット》も、シャブリエの影響を受けており、不協和音的な半音結合、旋法的な手法からくる自然短音階的な音の扱い、自由な7や9度の和音の使用が見られる。この作品は、34年後に管弦楽に編曲されている。ところで、ラヴェルは、自身の作品の編曲を多数手がけていることでも特殊である。30歳までの作品では、他に、ピアノ曲の《ハバネラ》、《逝ける王女の為のパヴァーヌ》と《鏡》がある。彼は、ストラヴィンスキーに「完璧なスイスの時計職人」と呼ばれているように、職人と看做されることを好んでいた。ピアノ曲として完成した作品を、その固有の可能性を更に明確に引き出しオーケストレーションを試みたのである。特に打楽器の扱い方、ハープの書法において非凡な才能が見いだされる。「管弦楽の魔術師」と呼ばれる所以でもある。

《ハバネラ》と《鐘が鳴る中で》から成る2台のピアノの為のパロディー風タイトルの《耳で聴く風景》は、国民音楽協会主催公演で初演され、公に作曲家としてデビューすることになる。聴衆の中のドビュッシーは、《ハバネラ》に魅了された。スペイン風のリズムや主題をもち、オスティナートの保続音上に倚音を駆使し、鋭い不協和音の響きが効果的である。後に管弦楽に編曲され《スペイン狂詩曲》の第3曲となる。後者は、完全4度を多用し響きを追究している。鐘、時計、チェイムにも魅了し続けた。

初めての管弦楽曲の為の《シェラザード序曲》は、全音音階を多用しロシア音楽の影響の強い作品である。同様に『千一夜物語』に靈感を受けた5年後の管弦楽伴奏の歌曲《シェラザード》は、ドビュッシーの《ペレアスとメリザンド》の語りのような歌唱法などの影響を大きく受けている初期の代表作である。

不朽の名作となり、出世作となったピアノ曲《水の戯れ》と《弦楽四重奏曲》は、作曲の師であるフォーレに献呈されている。前者は、アンリ・ド・レニエの詩句が題辞として引用されており、ドビュッシーの《水の反映》にも影響を与えたとも言われ、技巧的なトリルや、7や9度の和音を色彩豊かに混ぜ合わせた印象主義的な作品である。「あらゆるピアノ書法の革新の出発点」と、ラヴェル自身が語る。ピアノは、彼にとって特別であった。ピアニストであり、鍵盤上で作曲をし、新しい試みは全て最初にピアノ作品で実現している。ショパン、リストからの影響も大きい。後者は、旋法を駆使した魅力的な旋律をもつ作品で、3、4楽章でも1楽章の第1、2テーマを使用する循環形式をとっている。これらの作品で知名度を得ていたものの、年齢制限30歳の直前に5度

目の挑戦としてローマ賞に参加したが、予備審査で失格となる。その結果をみて音楽批評家たちの間で物議をかもし、「ラヴェル事件」として社会的スキャンダルとなり、パリ音楽院長らは辞任し、フォーレが院長となる。彼の存在は、それほどの影響を及ぼしたのである。

「自分自身の技能を知るには、他人の技能を学ばねばならない」と言及している。モーツァルトの古典的均整美と驚きの要素に感銘を受け、特に熱心に研究している。「作曲家は何かを語らなければならない。音楽感性が重要である。」とも述べる。彼の冒険的な和声語法は、旋法的、複調的な試みと共に調性に根ざし、旋律線と伴奏との緊張感となり、舞踏リズム、スペイン音楽、印象主義的技法からの影響を受けている。伝統の中での革新にこだわり続けた作曲家である。